様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：３２６４２
研究種目：若手研究
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１３０００

研究課題名（和文）自然言語における発話行為の意味論・統語論に対する形式的アプローチ

研究課題名（英文）A formal approach to the semantics and syntax of speech acts in natural language

研究代表者
井原　駿（Shun, Ihara）

津田塾大学・学芸学部・講師

研究者番号：９０８９８０３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、発話行為（speech acts)、特に命令文や感嘆文とその周辺的言語現象に焦点を当てた研究である。本研究の目的は、「自然言語における命令文や感嘆文は普遍的にどのような意味を持ち」、「個別言語間でどのような類型を示すのか」といった根源的問いに答えることである。特に日本語には命令や感嘆を表出する言語形式や標識が多様に存在するため、日本語の発話行為を研究することは両者の意味類型を先の段階に推し進める。そこで、本研究では、英語やドイツ語の発話行為に関する先行研究を参照しながら日本語を中心に意味の記述を推し進めた上で、その記述を捉えることが可能な形式理論を構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、日本語に存在する多様な文形式の発話行為を記述・分析したものである。 これらが時として同じ「要求」や「驚き」などの意味を持つにもかかわらず、文を構成する要素が異なるという事実は、各発話行為文の意味が導出されるメカニズムが異なっている可能性が高いことを示唆している。すなわち、本研究は、自然言語における発話行為の意味はある特定のアプロー チのみで説明されるものではなく、実際には言語毎の文形式に依存したバリエーションが存在するという仮説が提示されたことになる。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on speech acts in natural laguages, in particular imperatives and exclamatives, and their peripheral linguistic phenomena. The aim of the study is to answer fundamental questions such as: what are the universal meanings of imperatives and exclamatives in natural languages, and what typologies do they show across languages? The study of Japanese imperatives and exclamatives takes the semantic typology of these two languages one step further, especially as there is a wide variety of expressions and constructions expressing commands and exclamations in Japanese. This study, after advancing the description of meaning mainly in Japanese with reference to previous literture on speech acts in English and German, a formal analysis was developed that can capture such the facts.

研究分野：言語学

キーワード：形式意味論　発話行為　感嘆文　命令文　意味論　語用論　談話　意味類型

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、発話行為 (speech acts)、特に命令文や感嘆文とその周辺的言語現象に焦点を当てた研究である。発話行為とは、話し手が文を発話・伝達する際，どのような行為を表出するかという情報を含む、いわば「命題の意味そのものを超えた言語行為」のことである。従来の発話行為研究では、主に主張文 (assertions) や疑問文 (questions) に焦点が当てられてきた。一方で、話し手の願望や要求を表す、命令文 (imperatives) や、驚きや意外性を表す感嘆文 (exclamatives) については、上記の発話行為と比較して注目されてこなかった背景がある。2000 年以降になって、特に形式意味論 (formal semantics) の領域において、命令文や感嘆文の持つ様々な意味論的・語用論的特性が指摘され始めたものの、その主たる対象言語は英語やドイツ語等のゲルマン諸語に偏っており、「自然言語における命令文や感嘆文は普遍的にどのような意味を持ち」、「個別言語間でどのような類型を示すのか」といった根源的問いに答えるための研究を行う段階にないのが現状であった。特に日本語には命令や感嘆を表出する言語形式や言語標識が多様に存在するため、日本語の命令文や感嘆文を研究することは両者の意味類型を一つ先の段階に推し進める可能性が高い。それにもかかわらず、未だその意味解釈のメカニズムに十分な理論的分析が与えられているとは言い難く、その大きな理由の一つに、形式的かつ包括的に日本語の命令文や感嘆文の意味を分析するための枠組みが確立されていないことが挙げられる。

２．研究の目的

上記の諸問題を克服するには、まず (i) 英語やドイツ語の発話行為に関する先行研究を参照しながら日本語を中心に意味記述を推し進めた上で、(ii) その記述を捉えることが可能な理論を構築することが求められる。以上のことを踏まえると、本研究における大きな問いは以下のようにまとめられる。

- 記述的問い：自然言語における発話行為（特に命令文・感嘆文）はどのような意味的類型を示すのか。
- 理論的問い：発話行為に関わる言語現象を網羅的に捉えるためのアプローチとは何か。

本研究の目的は、日本語を中心とする発話行為の意味論・語用論的現象を記述しつつ、その言語事実を高精度で捉えることができる理論的枠組みを構築することである。

３．研究の方法

その方法論として、本研究では形式意味論と動的語用論を組み合わせた分析手法を用いる。本研究の手法の独自性は、発話行為の振る舞いを記述・説明するにあたり、形式意味論と動的語用論の枠組みを組み合わせた統合的分析を採用する点にある。この分析を採用する主なメリットは以下の点にある。(i) 発話行為の意味論から語用論へのマッピングを可能にしつつ、両者の棲み分けを明確に表示することが可能となる。すなわち、発話行為文の意味のどこまでが意味論のレベルで、どこからが語用論（談話）のレベルの現象であるかを明示的にした分析が実現される。さらに、(ii) 本モデルにおける語彙や文の意味表示には論理学で扱われる道具立てが用いられるため、記述や分析に対して十分な厳密性・反証可能性が担保される。

４．研究成果

(1) 日英語における命令文の性質の相違を文末のイントネーションや可能や読みなどを含めた多角的観点から意味記述し，その上で既存の命令文の諸理論の説明的限界を指摘した。日本語の命令文の振る舞いについては，命令文にモーダル演算子を仮定する理論を独自に精緻化することで，統一的分析を提案した。
(2) 通言語的に報告されている虚辞的否定 (expletive negation) が，日本語やドイツ語では感嘆文や命令文などの発話行為で生起することを観察し，Table-stack モデルと呼ばれる談話モデルを用いた語用論的認可環境を提案した。
(3) 典型的な日本語感嘆文のうち「ナンテ…ノダロウ」感嘆文の振る舞いを、(i) 疑問文への回答としての適切性、(ii) 文末イントネーションのバリエーション、(iii) 特定の終助詞とのインタラクション、(iv) 対比の「ハ」との親和性、(v) 聞き手による挑戦の可否の観点から観察・記述を試みた。 分析には Table-stack モデルと呼ばれる談話モデルを採用し、ノダロウ感嘆文の語用論領域における談話への影響を形式化した。これにより、 先の(i)-(v)の振る舞いを統一的に捉えることに成功した。
(4) 日本語の「ナンテ…ノダロウ」感嘆文について、さらに二つのタイプが存在していることを指摘した。具体的には、当該の感 嘆文の文頭に生起する wh 表現が「どれだけ」であるか「なんて」であるかによって意味導出のプロセスが異なることを指摘した。前者の「どれだけ」タイプ

はいわゆる個人嗜好述語と呼ばれる述語の主語が話し手以外であっても良いのに対して、後者の「なんて」タイプにおける個人嗜好述語の主語は話し手に制限されるという新たな事実をもとに、両感嘆文の意味を形式化し、振る舞いを捉えることに成功した。この成果は、自然言語における感嘆文の意味類型に「ジャッジ（判定者）が意味的に指定されているか否か」という新たな視座を提供した点で、当該の研究領域に貢献する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Kenta Mizutani, Shun Ihara	４．巻 29
２．論文標題 Two strategies for being ‘ at least ’ : Japanese "sukunakutomo" and English "at least"	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	６．最初と最後の頁 393 - 402
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Shun Ihara	４．巻 -
２．論文標題 The global licensing of Japanese expletive negation	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Proceedings of the 13th Generative Linguistics in the Old World in Asia (GLOW in Asia XIII) 2022 Online Special	６．最初と最後の頁 114-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Shun Ihara	４．巻 160
２．論文標題 Division of Labor between Semantics and Pragmatics of Canonical and Non-canonical Imperatives	５．発行年 2021年
３．雑誌名 言語研究	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11435/gengo.160.0_155	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井原駿	４．巻 56
２．論文標題 日英語における命令文の特性と意味制約	５．発行年 2021年
３．雑誌名 国際文化学研究	６．最初と最後の頁 25-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81012925	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kenta Mizutani, Shun Ihara	4．巻 28
2．論文標題 Decomposing the Japanese deontic modal "hoo-ga ii"	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Shun Ihara	4．巻 28
2．論文標題 From subjunctive alternatives to unconditionals and imperatives	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6．最初と最後の頁 195-210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 井原 駿, 水谷 謙太
2．発表標題 最上級修飾語のQUD-sensitivity: 新グライス派と構造理論によるアプローチ
3．学会等名 日本言語学会第164回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 Shun Ihara
2．発表標題 The global licensing of Japanese expletive negation
3．学会等名 GLOW in Asia XIII 2022 Online Special（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 Shun Ihara, Katsumasa Ito
２．発表標題 Exploring the discourse move of exclamatives
３．学会等名 Evidence-based Linguistics Workshop 2022
４．発表年 2022年

１．発表者名 Shun Ihara, Katsumasa Ito
２．発表標題 The discourse move of exclamatives revisited: a view from Japanese
３．学会等名 International Semantics Conference 2022 (InSemantiC 2022)
４．発表年 2022年

１．発表者名 Shun Ihara
２．発表標題 Pragmatic licensing of Japanese expletive negation
３．学会等名 科研ワークショップ「否定・極性・コトの諸相」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Shun Ihara, Yuta Tatsumi
２．発表標題 The Duality of Negative Attitudes in Conditionals
３．学会等名 Logic and Engineering of Natural Language Semantics 18 (LENLS18)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kenta Mizutani, Shun Ihara
２．発表標題 Two strategies for being "at least": English at least Japanese sukunakutomo
３．学会等名 The 29th Japanese and Korean Linguistics Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関